

村上海賊の史跡を 巡る旅

TOZSUN

和田竜の著「村上海賊の娘」の書評がきっかけ

(村上海賊の娘上巻の表紙)



この「村上海賊の娘」(新潮社)の上巻の扉を撫でた。扉はデザインも紙質もなかなか良い。中をめくると紙質もほどほどだし、字も大きめだし、難しい漢字もときどきフリガナがついていて読みやすい。

上巻は、天正四年(1576

年)の織田信長が甲斐信濃の武田軍を破って勢いに乗る西日本が舞台である。西日本の歴史物が詳細に書かれるのは久しぶりである。ほとんど奈良・京都の古の歴史と大阪の繁栄した町並みが舞台になることが多いが、その他は江戸幕府の置かれた関東が中心で、如何にも歴史は当時の権力者の意のままに不都合な物は消すという情報操作がされていることがわかる。そのためか、この本を書くために作者・和田竜は約85冊にも及ぶ地方(西日本)の文献を読破している。権力者の情報操作を掻い潜るには、地方に散見している日記や雑誌を読み込みつなぎ合わせていかなければならない。ミスでもあると、その1点をもとに権力者とその同調者たちは潰しにかかるからだ。

この事に気づいたのは、梅原猛著「葬られた王朝」や柴田哲孝著「下山事件 最後の証言」や帯木蓬生著「聖灰の暗号」や明智憲三郎著「本能寺の変 431年目の真実」などを乱読した結果である。乱読とは「いろいろな意見を聞くことができる」につ

きる。

話を元に戻して、海賊の娘の話である。海賊は2つに分けられる。1つ目は、悪い海賊(パイレーツ)である。通航する船から金銀財宝を奪い、さらには乗組員を殺害し、女子供を奴隷として連れ去る自己中心の海賊である。塩野七生のイタリヤ史でも、北アフリカのサラセンの海賊たちが度々イタリヤ海岸を襲い、財宝を略奪し、男は水夫に、女は奴隷にしたことが書かれている。イタリヤの海岸線に砦が多いのは見張り台だったそう。十字軍も同様のことを北アフリカにしていると言う。

2つ目は、良い海賊です。パイレーツと区別して「カイゾク」と和製英語で読むそうです。海賊のリーダーの下に統一され、ルールが確立されて、その元で地域の海上運航が安定化して落ち着いた時がやってくる。この村上海賊や眞鍋海賊は、淡路島以西と難波海の2つに瀬戸内海を分けて支配し、海上運航の安定化をもたらしていた。そのルールを作ったのが、村上武吉という村上海賊のリーダーで、彼を筆頭に三

島（因島・能島・来島）の村上上海賊で行う合議である。毛利に追従している因島村上（村上吉充）とリーダーで独立独歩の能島村上（村上武吉）と幼少の当主を支え村上三島の結束を重んじている来島村上（村上吉継）の合議でルールができたのだが、今では毛利家警固衆（海賊の呼び名を改めた水軍）や難波海の眞鍋海賊もそのルールに従っていた。瀬戸内海を運航する民間の船に、海賊が1名同伴していれば運航自由で攻撃しないと言うルールだ。

話は、その平和な瀬戸内海に波風が立つことになる。それがお騒がせの織田信長である。昔は、「天下布武」と言うことで英雄視していた織田信長だが、のちに天下を奪取した豊臣秀吉の自分を美化するためにした情報操作だと分かると、単なる自己中心的なカリスマ性のある武将に思える。この織田信長が、一向宗弾圧に乗り出して7年目の大阪が舞台だ。現在ある大阪城は、もとの大坂本願寺が炎上して消滅した跡に、豊臣秀吉が築城した城である。浄土真宗に本願寺派

と大谷派があるが、このとき紀州に移った顕如と残った教如により2派に別れたそう。本願寺派を西本願寺、大谷派を東本願寺と呼んでいる。

上巻は、時代背景紹介と当時の大坂の地理と本願寺内部の様子、織田信長方の天王寺砦の様子、そして場所が飛んで、毛利家の小早川隆景らの様子、能島村上の本拠地・能島の様子、そして主人公の武吉の娘・景（キョウ、景姫）の登場である。

下巻は、村上・毛利合同水軍と眞鍋・泉州合同水軍の木津川合戦（1576年7月）の悲惨な殺し合いの描写の連続であった。正直ここまで書かなくても良いのではと思う。景にしても眞鍋七五三兵衛（まなべしめのひょうえ）にしても個人的な武力は卓越しているが、小兵や水兵が意図も簡単に殺害されるのを面白いとは言えない。二人は憎み合い、愛し合い、殺し合うのだが、海底に沈んで殺されたと思っても、これでもかこれでもか生き返ってきて大奮闘する。少々ウルトラマンに見える。

この合戦では、毛利・村上合同

水軍が勝利し、大坂本願寺へ兵糧米を運び込むことができて、暫しは瀬戸内海一面を村上上海賊が支配し平和なときが続くが、またしても織田信長が鉄張船（てつぱりぶね）を、三重の九鬼水軍に建造させて、難波海を再支配し、天正八年（1580年）に、完璧に大坂本願寺を取り囲むことよって炎上させている。

感想としては、次の5点を挙げる。一つ目は、タイトルにあるように村上武吉の娘・景がトゥームレイダーのアンジェリーナ・ジョリーのようには鮮やかな大活躍するところだ。和風の丸顔が美人とされた時代に、野人の如く八頭身で彫りの深い顔の景姫が、泉州海賊や村上上海賊の将兵すべてを魅了している。天文十二年（1543年）、周防の大内義隆と戦ったときの大祝三島安用の娘・鶴姫と同じ「鬼手（きしゅ）」を身に付けている。何をやらかすか分からないところが読者を惹きつけてやまない。私も景が登場するとワクワクした。

二つ目は、ほとんど殺し合いなので、残虐すぎて見てられなかったが、その中で、武器として登場

してくる七五三兵衛の使う「鉾（もり、鯨などを仕留める道具）」と村上海賊が使う秘法の「焙烙玉（ほうろくだま、打ち上げ花火玉の形をした爆弾）」が目新しかった。刀と弓から鉄砲へ移った時代の途中で、海賊の武器として登場している。なお、鉄砲を扱う雑賀党（さいかとう）の鈴木孫一も景と行動を共にする形で登場している。

三つ目は、毛利家や村上海賊の合議による戦略決定に対して、織田信長や眞鍋七五三兵衛の突出した戦略決定の比較を属することが出来る。景は村上海賊に属しながらも突出型で、「鬼手」としての役割を果たしている。なお、戦においては突出型の方が優位だが、平和時には合議型が向いている。突出型の安倍晋三首相が情報操作しながら戦争へと向かっているのを感じる。

四つ目は、リーダーとその重臣の関係である。大坂本願寺に立てこもる一向宗の1万以上の門徒のリーダー顕如（けんによ、第11世門主）とその側近・下間頼龍（しもつまらいりゅう）の関係、村上海賊のリーダー能島・

武吉と因島・吉充や来島・吉継の関係、泉州海賊の長・沼間義清（ぬまよしはる）と新興海賊の眞鍋七五三兵衛の関係などが、その時々々の場面で重要な意味を持つてくる。

最後に、一番関心を持ったのは地理である。この時代の瀬戸内海の地理（と言っても城や砦や川や島など）を知ることが、この時代の歴史を読む上で大きなヒントを与えてくれる。さらに、尾道から「しまなみ海道（西瀬戸自動車道）」を通り訪ねた三島神社（大山祇神社）の国宝館（源義経の鎧が展示されているので有名）にあった巨大な大太刀が、村上海賊たちが使っていたと実感した。さらに、そばの公園にあった姫銅像が「鬼手」をうんだ鶴姫だと実感した。それは景姫にも通じる。

（書評を若干修正）

自家用車で一週間の旅に出ました

今回、会合で「愛媛ツアー」の案内に接し、村上海賊を訪ねる

というフレーズに思わず飛びついてしまった。行くからには、他に訪ねたい場所もあり、自家用車を駆使して妻と二人で参加することにした。一週間に及ぶ旅になった。十月十四日（土）からの二十日（金）までで、ちょうど総選挙ともぶつかってしまったのだが、予約の関係もあるので優先することにした。東日本が寒秋に襲われていたときだが、隙間を縫うように比較的穏やかな気候で旅をすることができた。

今回の旅に飛びついたのには3つ理由がある。一つには村上海賊関係のいろいろな資料がほしかったこと。二つ目に妻に「しまなみ海道と大山祇神社」を見せたかったこと。三つ目に「鬼ヶ島（鬼ヶ城）と楯築弥生墳丘墓」へ行きたかったことである。しかし、六十代後半の長距離運転は無理だったのか、帰宅後熱が出て寝込んでしまった。

一日目 明治村見学、大津で宿泊
二日目 姫路城見学、吉備津彦神社見学、楯築弥生墳丘墓見学、尾道で宿泊

三日目 大山祇神社見学、今治タオル美術館見学、全退教ツアー

に合流、子規記念博物館で「水野広徳・軍服を脱いだ平和主義者」の講義を受け、道後温泉で楽しい交流会後宿泊

四日目 松山城見学、潮流体験、村上水軍博物館で「村上水軍について」の講義（素晴らしい資料が手に入り大喜びです）後見学、加計学園獣医学部建設予定地見学（これも良い資料が手に入りました）、今治のホテルで「南予の人・上甲米太郎（植民地教育とたたかった日本人教師）」の講義を受け、前日と同様の楽しい交流会後宿泊

五日目 新居浜の別子銅山東平（「とうなる」と読む。東洋のマチユピチュと言われる産業遺跡）見学、マイントピア別子で「別子銅山に連れてこられていた韓国人労働者に会う」実践をされてきた尾上さんから講義を受け、昼食後ツアーは散会しました。私たちはこの後、淡路島の洲本宿泊

六日目 神戸の妻の友人宅訪問、妻は新神戸より新幹線で帰宅しましたが、私は自家用車とともに長距離運転の帰宅につきましました。この日は長野県飯田市で宿

七日目 寄り道して帰宅

以上が今回の旅の全貌ですが、高速道路代とガソリン代と二人分の宿泊費・ツアー代と見学料やお土産代の合計は、二十八万円となり愕然としました。これに疲労代が上乘せされました。他の方々は飛行機で参加しているので、早めの割引を利用して、二人で十四万円ほどで済んでいるようです。それも疲労感なく楽しい様子でした。

とは言え、村上水軍関係の資料が手に入ったことと知人ができたので良しとしましょう。

しまなみ海賊散歩

次の地図にあるように、尾道市から今治市までの芸予諸島をつないだ高速道路が「しまなみ海道」と呼ばれています。風光明媚な景観は一度は見ておきたい場所です。この島々に村上海賊の城跡や大社や美術館・博物館が点在しています。



（村上水軍博物館パンフより）

尾道市の方から順に紹介すると、最初は向島、次が因島（村上吉充が治めていた因島村上氏）、続いて生口島、大三島（大山祇神社がある）、伯方島、大島（沖合の能島に村上武吉の能島村上氏の城跡がある。またここに、今治市村上水軍博物館がある）、今治市と続く。最後の来島海峡大橋の眼下に来島（来島村上氏の城跡がある）

大山祇神社と鶴姫

大山祇神社紫陽殿・国宝館には、源義経や源頼朝が奉納した

鎧や斉明天皇が奉納した禽獣葡萄鏡など国宝と国宝級の武器が所狭しと陳列されている。さらに、護良親王の太刀や大内義隆・北条時宗の太刀、弁慶の薙刀や平重盛が奉納した水瓶、後醍醐天皇の繪旨など枚挙に暇がない。実物を見ていただくか、神社で購入した次の写真解説書を見ていただきたい。

また、同時に購入した漫画本「海の鈴 つる姫物語」も歴史を知る上では貴重なものである。

この国宝館や漫画本に出てくる河野と大祝（おおほうり）や祝と言う名前に興味を持った。河野通信やその一族はたくさんの鎧や太刀を奉納している。この河野家と大山祇神社の祭祀を司る大祝職は三島家が代々継いできている。（平成の世で第80代を数える）河野水軍と三島水軍と村上水軍の関係は？

三島つる姫は、天文十二年（1543年）に鎧（国宝館に現存）をつけ、総大将として恋人の陣代・越智安成の敵を討つべく、陶晴賢の大内義隆軍と対置している。鬼神の如く戦い勝利した。大内義隆はその後大山祇神社に詫

びを入れ刀剣を奉納している。



（大山祇神社社務所発行）



（大山祇神社社務所発行）

村上海賊と戦国大名

弘治元年（1555年）厳島合

戦で、陶氏を破った毛利氏は、永禄四年（1561年）の豊前蓑島沖合戦で、豊前大友氏に勝利して勢力を広げていった。その際協力した村上三氏は、毛利家の実質的な支配者だった小早川隆景からそれぞれ礼状をもらっている。この後、村上武吉（能島）は、大友水軍や阿波三好家の三好実休と誼（よしみ）を通じている。元亀二年（1571年）には、大友宗麟の呼びかけで毛利氏包囲網が作られ、能島村上氏・大友氏・阿波三好氏VS毛利氏・来島村上氏・因島村上氏の対立が生じている。

厳しく能島城を攻められた武吉は毛利氏と和睦し、その後は戦よりも瀬戸内海交通の安全を中心に運営していたように思われる。前出の「村上海賊の娘」に出てくる木津川合戦は、天正四年（1576年）で、この合戦では、村上海賊は毛利氏と協力して戦ったようである。



(村上水軍博物館発行)

村上海賊の城

因島村上氏は、本城を時代によつて移動したと言われている。初期は長崎城(因島)、弘治元年(1555年)厳島合戦の恩賞として余崎城(向島)、全盛期の村上吉充のときは青木城(因島)、さらに山城の青陰城(因島)である。

毛利方の武将として名を連ねた生口氏は、倭崎城(生口島)で天正四年(1576年)第一次木津川口合戦で活躍する。島の瀬戸田は、当時尾道に次ぐ港町であった。

大三島の沖にある古城島に甘

崎城があつた。ここは海の難所と言われる鼻栗瀬戸を押さえる位置にある。来島村上氏の重臣の村上吉継が管理していた。関ヶ原合戦後、藤堂高虎が来島村上氏の元家臣たちをそのまま在城させ手厚く保護したという。慶長十三年(1608年)藤堂高虎が伊勢に国替えになったとき廃城となつた。

来島海峡にある小島に務司城(武志島)や中途城(中渡島)があり、能島村上氏が管理していたが、天正十三年(1585年)ころ退去したようだ。

来島海峡の今治平野側にある小島に来島城(来島、今治市波止浜沖)があり、宝徳三年(1451年)ごろ、伊予の守護であつた河野氏が管理していた。河野氏は守護として伊予を治める勢力だつたことが分かつた。河野水軍とも言われていたようだ。このあと、大永四年(1524年)に来島村上氏が在城していた棟札が見つかつている。大山祇神社の大祝職三島氏も今治に別宅があり三島水軍を率いていた。推察すると、河野水軍と三島水軍を来島村上氏は引き継いだと思わ

れる。河野氏は衰退し、三島氏は水軍から離れ大山祇神社の大祝職として現在まで推移しているようだ。

最後に、大島の沖にある小島に能島城(能島、鯛崎島)があり、海の難所の宮ノ窪瀬戸を押さえる位置にある。ここを能島村上氏、特に村上武吉や息子の村上景親らが管理していた。小説では武吉の娘・景姫がここで活躍する。また、城跡からは、瀬戸美濃焼天目茶碗や青磁香炉や備前の壺などの破片が多数見つかつている。



(村上水軍魅力発信推進協議会発行)

次号に続く